【土木史研究　講演集　Vol.23　2003年】

# 江戸城下町における神社の配置とその原理

A Study on the Principles of Shinto-shrines' Location in Edo City

篠田明恵**・福井恒明***・中井祐****・篠原修*****

By Akie SHINODA , Tuneaki FUKUI , Yu NAKAI , Osamu SHINOHARA

我々は「神社は土地に密着して簡易には動かないし造れない」という常識を持っている。しかし江戸期には為政者によって神社が頻繁に移転していたという事実がある。本研究はその原理を解明することを目的とした。まず江戸の時代背景を把握し、各神社の歴史概略を調査した。次に各神社の配置及び時代毎の神社配置の変遷を明らかにした。さらに創祀、遷座という観点から江戸城下町の神社の配置原理を明らかにした。そして神社は江戸時代には特に遷座しており、その目的は幕府の城郭整備や城下町開発によるものが多数を占め、神社も都市活性化要素として利用されていたことが分かった。

## 1、はじめに

日本の主要都市は、戦国末から江戸初期に建設された城下町をその出発点としている。その都市設計手法は日本独自のものであり、設計原理の解明は、確立していないこれからの日本の都市設計においても重要な意味を持つであろう。

こうした城下町の設計原理の既往研究には、街路や水路に注目した池田による『近世城下町における都市秩序形成 [1)]』や阿部による『江戸における都市秩序形成 [2)]』、寺や墓地に注目した鈴木による著書 [3)4)]はあるが、神社の配置との関係に着目した研究は見当たらない。

都市の構成要素として宗教施設が重要な位置を占めるのはいうまでもないが、とりわけ土地や人とのつながりが深いと現在では考えられている神社は実は江戸期には為政者によって神社が頻繁に移転させられていたという事実がある。城下町の設計において神社をどのように取り扱ったのかは大変興味深い問題である。

そこで本論文では、我国の首都東京都の前身である江戸城下町の神社を対象とし、まず、城下町における神社配置の変遷、特に創祀(神社の設立)、遷座(神社の移転)に注目して、城下町における神社の配置原理を解明することを目的とした。

最初に、江戸城下町の発展過程、その状況を整理した。一方で神社の歴史の概略を文献などで調査し、さらに現地調査を行なった。

次に、『御符内寺社備考 [5)]』および『東京都神社史料 [6)]』をもとに、『江戸情報地図 [7)]』と照らし合わせながら各社の配置の変遷を明らかにし、さらに江戸城下町における時代毎の神社配置を明らかにした。

以上をもとに神社の創祀、遷座に注目し、分析および考察を行ない、江戸城下町における神社の配置原理を明らかにした。

なお、分析対象とする神社は、江戸城下町にある神社のうち、『御符内寺社備考』に書上げられている 108 社、それに江戸の代表的な神社 2 社を加えた。計 110 である。

## 2、江戸における神社の概要

江戸における神社の位置づけについて、幾つかの観点から、その概略をまとめる。

### 2.1 神社の信仰系統

対象神社 110 社の信仰別神社数を表1に示す。稲荷神社が全体の四割を占め、次に神明社、八幡宮と続く。

*key word : 江戸城下町、神社配置、遷座
**:学生会員　東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修士課程
***正会員　工修　東京大学大学院助手
****正会員　工博　東京大学大学院講師
*****フェロー会員　工博　東京大学大学院教授
工学系研究科社会基盤工学専攻(〒113-8656 東京都文京区本郷7－3－1)

表1 信仰系統別神社数

| 神社名 | 社数 |
|---|---|
| 稲荷神社 | 44 |
| 八幡宮 | 17 |
| 神明社 | 7 |
| 氷川神社 | 4 |
| 天満宮 | 2 |
| 熊野神社 | 2 |
| 諏訪神社 | 1 |
| 鹿島神社 | 1 |
| 熱田神宮 | 1 |
| 白山神社 | 1 |
| その他 | 28 |
| 合計 | 108 |

## 2.2 神社の創祀・遷座

次に、神社の創祀・遷座について述べる。但し神社縁起に基づいているので、史実である確証はないことに注意しなければならない。

### a)数について(図1)

**創祀**

創祀は弥生時代の昔からされていて、その数は、平安時代、室町時代、江戸時代に多い。時代の始まり、幕府の事業が盛んな時や、江戸の華やかな時代に創祀される傾向がみられる。

**遷座**

遷座は、太田道灌の時代に多少行なわれてはいるが、それ以外は殆ど江戸時代に行なわれている。江戸時代の中でも、初期の元和、寛永年間と、中期の元禄から享保にかけての2回ピークがあり、幕末にかけて収束していく。

江戸時代は、遷座数が創祀数を上回っていることが特徴的である。

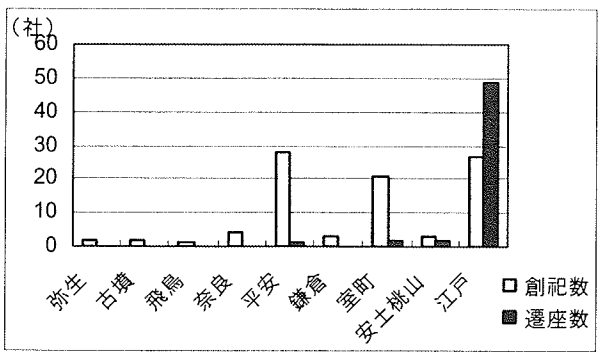


図1 時代別神社の動態

### b)縁起について

**創祀**

創祀の縁起には、神社を興した主体とその理由が関係する。ここでは、創祀の主体を2種類、創祀の理由を5種類に分類した。

創祀主体

1 村人などその場所に定住する人(定住者)

2 遠征や旅で寄った人など(非定住者)

創祀理由

1 戦勝祈願など何かを願ったもの、祈りが叶ったことに対する感謝(祈願)

2 何かを鎮護するため、鎮守(鎮護)

3 霊験、神事の発生(霊験)

4 何かを偲ぶ、あるいは畏れているものを治める(畏敬)

5 その他不明

この組み合わせ計10通りについて、それぞれの数をまとめたものが表2である。まず主体は、その土地の定住者が祀り始めたものと、非定住者が祀り始めたものとほぼ同数である。縁起の種類別では、霊験、霊夢があってそれを祀ったものが多い。

また、村や地元の人が祀りはじめたものには村や土地の霊験、神事があったからや、鎮守として祀られた神社が多い。

非定住者が祀ったもののなかでは、鎮護として、あるいは霊験の発生により祀っているものが多い。また表2には表れていないが、戦勝祈願は江戸が東方征伐の通り道という理由から非定住者に多い。

表2 創祀縁起の分類

| | | 創祀主体 | | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| | | 定住者 | 非定住者 | |
| 理由 | 祈願 | 1 | 4 | 5 |
| | 鎮護 | 16 | 10 | 26 |
| | 霊験 | 22 | 9 | 31 |
| | 畏敬 | 7 | 1 | 8 |
| | その他 | 2 | 23 | 25 |
| 合計 | | 48 | 47 | 95 |

**遷座**

遷座の理由は、5種類に分類できた。理由別の遷座数は図2のとおりである。

**遷座の理由**

1 大名屋敷、武家屋敷、火除地、広小路などの御用地になる(御用地)

2 将軍や幕府の命により城郭整備を行う天下普請のため(天下普請)

3 重要施設造営のため(寛永寺、白山御殿、増上寺)

（重要施設造営）

4　奇端、奇妙なことが起こったため（奇端発生）

5　城などを鎮護するため、記念事業として（城鎮護・記念事業）

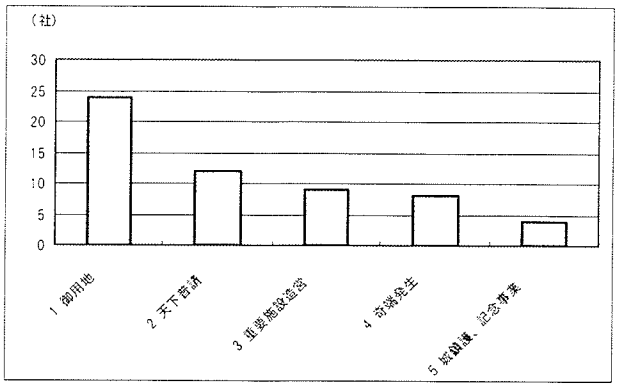


図2　遷座理由の種類別数

遷座の理由として最も多いのは、御用地になるためである。そして天下普請、重要施設造営と続く。これらは幕府の強制的な移転であり、遷座は江戸幕府の強制移転によるものがその殆どを占めている。

これは江戸幕府によって、新たに江戸の都市計画を行なう中で、神社の移設を避けて通れなかったことを表している。

## 2.3　神社の立地

創祀・遷座した延べ167の神社を地図上にプロットした。立地を判断するに当たって用いた資料は、江戸―東京市街地図集成 1657～1895（柏書房 1988 年発行）、一万分の一地形図（国土地理院 1995 年発行）、江戸名所図会[10]である。これらと合わせて現地調査を行い、立地場所の特定を進めた。

神社の立地は、平地、台地など、高低差に着目した立面的分類で5種類に（図3、4）、立地場所周辺の状況に着目した平面的分類で4種類（図5）に分類した。

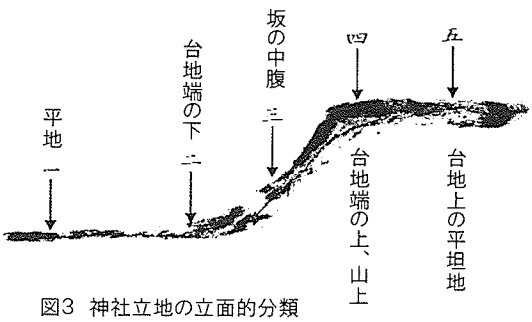


図3　神社立地の立面的分類

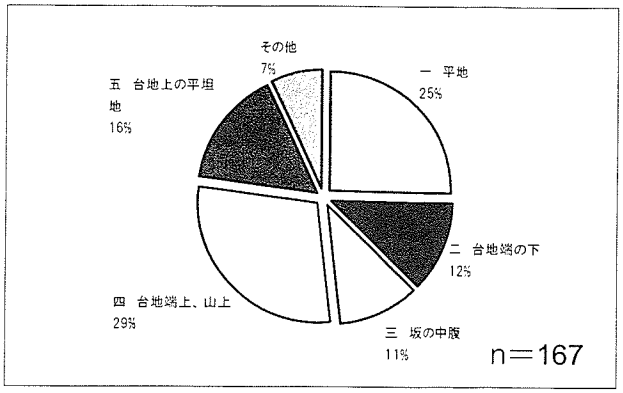


図4　立面的分類の割合

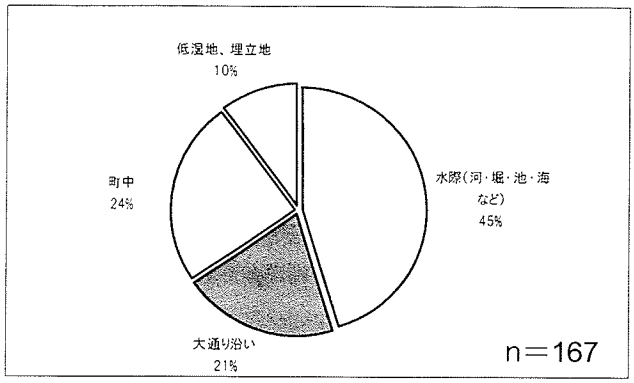


図5　平面的立地の割合

神社は、台地上に立地するものが多く、その中でも台地端、山上などの崖上のようなところに位置しているものが3割を占めている。

平地にも立地しているが、多くは川沿い、町中、街道沿いや低湿地などの特徴が付随する土地である。

総合すると、神社は地形や都市の特異点に立地している場合が多いといえる。

## 2.4　神社の別当寺院

江戸時代は 1664 年以降の寺請制度で、神社も寺の管理の下に置かれるようになった。その別当寺院について各神社を分析した。但し、宗派が特定できないものがあったので半数程度の神社についての分析となっている。

表3　別当寺院の宗派別数

| 宗派 | 社数 |
|---|---|
| 天台宗 | 30 |
| 真言宗 | 25 |
| 黄檗宗 | 3 |
| 浄土宗 | 2 |
| 臨済宗 | 2 |
| 日蓮宗 | 2 |
| 時宗 | 1 |
| 曹洞宗 | 1 |
| 合計 | 66 |

別当寺院の宗派は、天台宗と真言宗が多くなっている。徳川家の菩提寺である増上寺の末寺が少なく、天台宗の東叡山の末寺が多いのが目に付く。

真言宗の末寺が別当寺の神社は、浅草橋から浅草の隅田川沿岸、小石川から牛込四谷まで、増上寺周辺、深川に立地している。古儀真言宗では深川永代寺、浅草金剛院など、新義真言宗では牛込南蔵院、京都智積院、牛込南蔵院、醍醐寺三宝院などの末寺が多い。真言宗の多さは意外である。なぜなら御符内寺院は浄土宗、日蓮宗が多いからである。

天台宗の末寺が別当寺の神社は、上野東叡山周辺、隅田川沿い、小石川沿い、古川、溜池付近に多い。圧倒的に寛永寺の末寺が多く、浅草寺も多少ある。寛永寺の影響は相当大きかったのが分かる。

### 2.5 江戸の神社のまとめ

江戸の神社は、稲荷神社がその多くを占め、台地端や川、海沿い、街道沿いなどに立地していた。平安・室町・江戸時代に創祀の盛んな時期があり、江戸時代における遷座の多さは特徴的である。別当寺院の宗派は、天台宗と真言宗が多く、神社にも天台宗の寛永寺の影響が伺える。

## 3、時代別の神社配置の変遷

神社の創祀および遷座に着目して江戸城下町における神社配置の変遷について分析する。

### 3.1 時代区分

原始から江戸時代末期までの時代を城下町の発展過程や時代の動きを踏まえ、次の五つの時代に区分した。

① 太田道灌以前(～1455)
原始から太田道灌江戸城築城前

② 戦国期(1456～1589)
太田道灌江戸城築城から徳川家康江戸城入城まで

③ 天下普請期(1590～1643)
徳川家康江戸城入城から天下普請完成まで

④ 城下町拡張期(1644～1687)
天下普請完成から元禄時代前まで

⑤ 城下町安定期(1688～1865)
元禄時代から幕末まで

### 3.2 神社配置の変遷

前述の時代区分に沿って、神社の創祀及び遷座の模様を各時代地図に示す(図6～10)。

① 太田道灌以前 (図6)

**創祀**

39 社創祀されている。全体的に南北にのびており、海岸沿いから隅田川沿いにかけてと江戸城外延に、台地端や高台、境界という立地に多く立地している。

日本武尊関係や、慈覚大師、源義家、頼朝などが、東国征伐や巡業のために江戸を通り創祀しているものがある。

**遷座**

1 社 1 回遷座しているが明確でない

② 戦国期(1456～1589) (図7)

**創祀**

城郭内、南と西に創祀されている。北東側にはあまりない。14 社中 7 社が太田道灌により創祀されている。

**遷座**

太田道灌時代に城の鎮護として西久保八幡、赤城明神を江戸城から放射状に遷座させる。まるで城の西南方向の外延に、防御線を張っているように見える。

北条氏の時代には理由が不明の遷座が 2 社ある。

③ 天下普請期(1590～1643) (図8)

**創祀**

新しく開拓された所(深川)や、外堀となるところより外側の小石川、四谷、赤坂、品川にかけて創祀されている。立地の点では、台地端や坂の上が多いことが特徴的である。

**遷座**

13 社 16 回の遷座がなされている。江戸城内から外側へと移っているもの、これから開拓される新開地へと移っているもの、神社周辺を開発するために未開発地だった場所へと移転させられるものがある。

④ 城下町拡張期(1644～1687) (図9)

**創祀**

それぞれの地の鎮守として創祀されたものと、明暦の大火後橋ができてから本格的に発展した本所に創祀されたものがある。

**遷座**

城郭内での動きは殆ど収まっており、2 社しか遷座していない。それに対して城郭外では 12 社 12 回の遷座が見られる。

主な遷座理由は、家綱による施設整備(白山御殿、増上寺、寛永寺)や、明暦の大火や火事により類焼、若しくは大火後の都市計画の転換により神社敷地が御用地となったための移転がある。

⑤ 城下町安定期(1688～1865) (図10)

**創祀**

本所深川と、小石川などに少数の神社が創祀された。

**遷座**

遷座理由として上野寛永寺造営と、綱吉・吉宗に関連したものが多い。火事の影響がきっかけで御用地や屋敷地へとなるものがある。

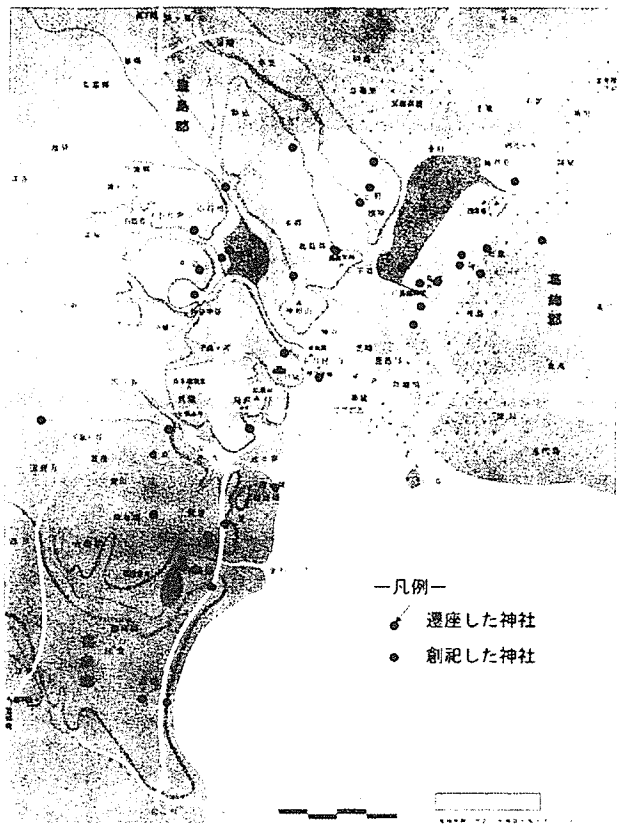


図6 江戸における神社変遷図(太田道灌以前)

(内藤昌「江戸と江戸城[8]」の原図より篠田作成)

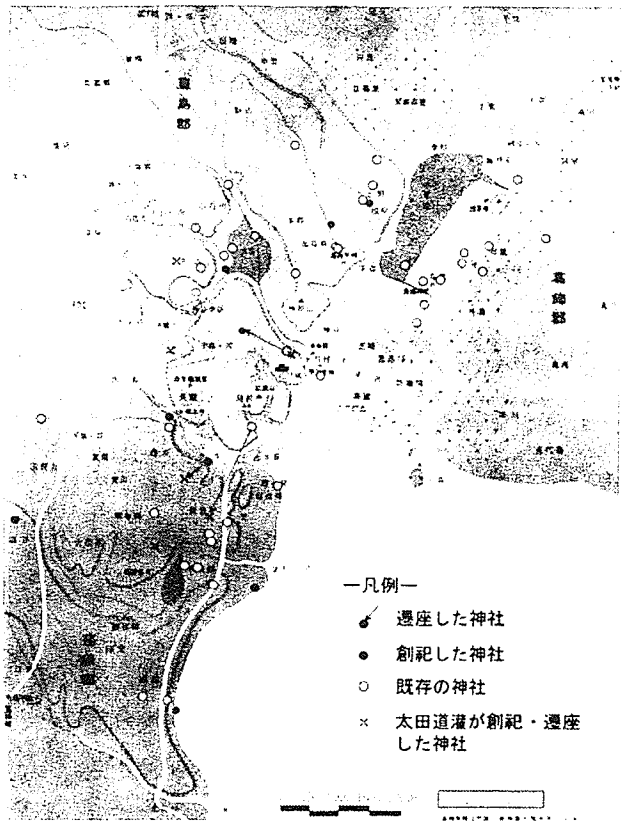


図7 江戸における神社変遷図(戦国期)

(内藤昌「江戸と江戸城[8]」の原図より篠田作成)

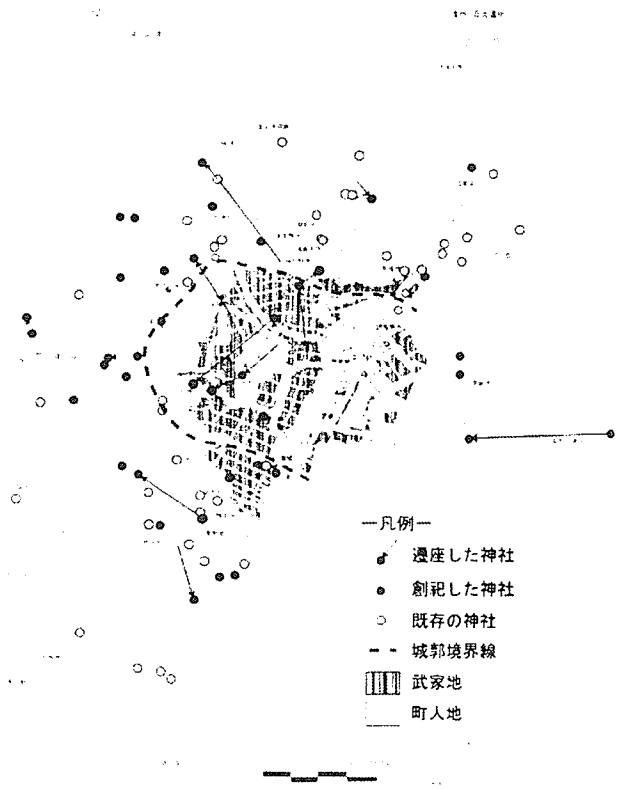


図8 江戸における神社変遷図(天下普請期)

(内藤昌「江戸の町[9]」の原図より篠田作成)

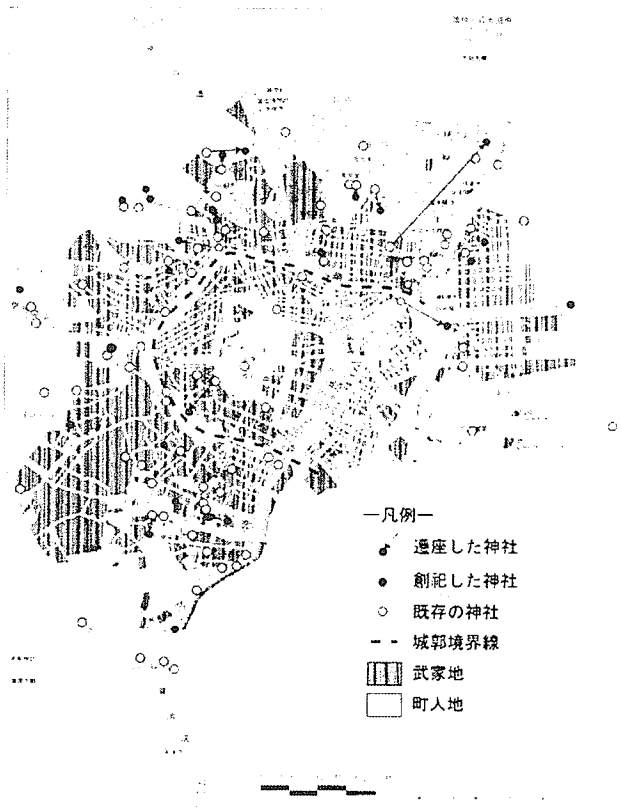


図9 神社変遷図(城下町拡張期)

(内藤昌「江戸の町[9]」の原図より篠田作成)

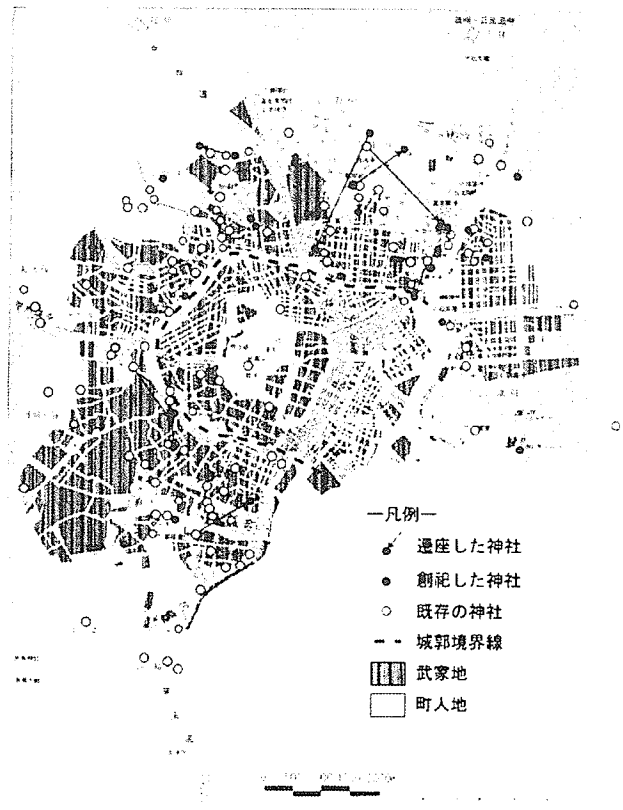


図10 江戸における神社変遷図(城下町安定期)

(内藤昌「江戸の町[9]」の原図より篠田作成)

## 4、分析・考察

### 4.1 時代による特色

創祀、遷座、各時代の全体的配置の特色を述べる。

① 太田道灌以前(～1455)

創祀数 47 社、遷座数 1 回で、住民や、江戸に立ち寄った人による創祀が多い。配置は江戸城南北に伸びていて、浅草辺りと芝飯倉辺りに密集、上野山、湯島、小石川牛込辺りにも立地している。したがって当時道や村があったところには神社があったといえる。地形との関係では台地端や台地の上、川沿い、海岸沿いの立地が多い。

② 戦国期(1456～1589)

創祀数 12 社で、遷座数 4 回である。この時代は太田道灌が江戸城を築城した時代である。この頃から城内から城外への為政者による遷座が行なわれるようになった。

創祀は為政者が城鎮護のために行なったものと、村人が創祀したものとに分かれる。遷座は城から放射状に外側へ移動している。

太田道灌が関係した神社が、再興されたものも含めて全方位に立地しており、太田道灌の篤い信仰心が感じられる。

全体の配置を見ると、城の南北、浅草と芝飯倉辺りに密集している。上野山、湯島など台地端への立地や川沿いへの立地が多い。

③ 天下普請期(1590～1643)

創祀数 19 社で、遷座数 22 回である。隅田川沿岸と中山道から東海道にかけて城の西側に創祀されている。

この時代は天下普請に伴い、その工事場所に当たる神社は悉く城内から城外へと移転させられた。

遷座先は、もともとその神社との由縁があるところや、小高い場所であることが多い。

神社全体の配置を見ると、台地端や水際への立地が多く、また城周辺の全方位に配置されるようになった。

④ 城下町拡張期(1644～1687)

創祀数 14 社で、遷座数 15 回である。

この時期には天下普請も終わり、江戸の中心的基盤は完成した。そのため城外での遷座が多くなる。遷座理由は、御用地になるものが多い。これは明暦の大火の影響もあり、城外での都市計画が本格的に実行されてきたことによるものと考えられる。また、隅田川東側の開拓がはじまり、その場所での神社創祀も見られる。

遷座は比較的短距離が多く、これは社地を含む地区

が新しく区画割をされたためだと考えられる。

全体的な配置としては、新開拓地や町人地近くに隣接して立地する神社が増加している。以前は地形的特徴のある場所への立地が多かったが、立地場所として町も加わってきたと考えられる。

城の南北方向に伸びていた神社配置も全方位に及び、範囲も拡大してきたのがわかる。

⑤ 城下町安定期(1688～1865)

創祀数 18 社で、遷座数 26 回である。遷座理由は記念事業によるもの、寛永寺造営によるものが多い。範囲は江戸城より北側で遷座するものが多い。これはこの地区が火災による被害を受けており(『江戸十大火災図[11]』による)、類焼した神社が遷座したものと考えられる。御用地となり遷座するものも、火事により類焼した機会に遷座したものが多いと考えられる。

このことから火事は都市計画の実現にとって重要な機会となっていたと考えられる。

他の場所での遷座は地区内など短距離が多く、これは幕府による地割の変更に伴ったものと考えられる。

また、江戸城から遠ざかるのではなく、近付く方に遷座するものが多く、神社の遷座も元禄期でほぼ収束している。このことは江戸城下町拡大の収束と対応していると考えられる。

⑥創祀・遷座のまとめ

創祀

元々道や村があり、台地端や川、海岸沿いに創祀されていたが、江戸城が築城され、城下町が発展するに従って、城から遠い所や新しく開拓される所へと、創祀される場所も移動する。立地条件も台地端や川沿いなどから町中、低地などに変化する。

遷座

広い範囲を支配するような為政者が現れていない太田道灌以前の時代には、遷座は殆ど行なわれていない。しかし太田道灌以降、城の鎮護のための遷座再興など、為政者の影響を受けた神社は数多い。徳川家康の江戸入府後は、先ず城郭整備が行なわれ、それに伴い城郭内の神社は城郭外へと遷座させられる。このときには立地条件は劣らない台地端上などへと遷座している。しかし城下町の発展や都市計画上のために遷座するようになると、条件の悪い低地や湿地にも遷座させられることが多い。

### 4.2 創祀・遷座の立地による特色

創祀、遷座した神社の立地について時代毎の変化を考察する。

① 太田道灌以前

高台が半数を占めているが、低地の川沿いなども多い。

② 戦国期

数が少ない。高台が 6 割である。

③ 天下普請期

台地端が多いが、町中や裏通り沿いも立地する。

④ 城下町拡張期

台地端が多いが、低湿地、埋立地にも立地する。

⑤ 城下町安定期

高台が少なく、平地、低地が多い。

この結果から、時代と共に立地条件は変化していくことが分かる。

次に、遷座理由と遷座先立地条件の関係について述べる。

1、御用地　遷座前は台地端に 8 社立地していたが遷座後は僅かに 1 社のみとなっている。

2、天下普請　立地条件はあまり変化していない。

3、重要施設造営　寛永寺造営では山の上から平地上に移動している。他はあまり変化していない。

4、奇端　一般的な傾向は見出せないが、立地条件の悪い場所に遷座する場合は、もともと遷座先に何か由縁があったものが多い。

5、記念事業　元の社地より立地条件が良い。

以上のことから、立地は時代により変化し、初期には地形的な条件が重視されたのに対し、その後次第に幕府の都市計画上の必要から場所を選定されるようになってくることが分かる。また、遷座する場合には、その理由により立地の条件に特色があるということが分かる。

### 4.3 具体例(日枝神社)

日枝神社は、南北朝以前江戸氏が江戸郷の守護神として山王宮を江戸館に祀っていたものを、文明十年(1478)大田道灌江戸城築城に際し、江戸居館跡地(山上)に鎮護の神として勧請した(図11の A)。

天承十八年(1590)徳川家康が江戸に移封し天下普請のため、江戸城内の梅林坂より紅葉山に遷座する(図11の B)。

慶長十二年(1607)本丸工事(天下普請)のため半蔵

門外の麹町隼町(現国立劇場)に遷座した(図11の C)が、明暦の大火で類焼御用地になり、万治二年(1659)に松平主殿頭忠房の邸宅地であった溜池の上、永田町星が丘に遷座し、邸内鎮守として祀られていたものと合祀した(図11のD)。

日枝神社は江戸の惣鎮守であり、江戸の神社の最高峰といっても過言ではない。しかしその神社でも江戸城整備に当たっては,移転地の立地条件は劣らないものが確保はされているものの、その外側へと移転させられている様子が分かる。

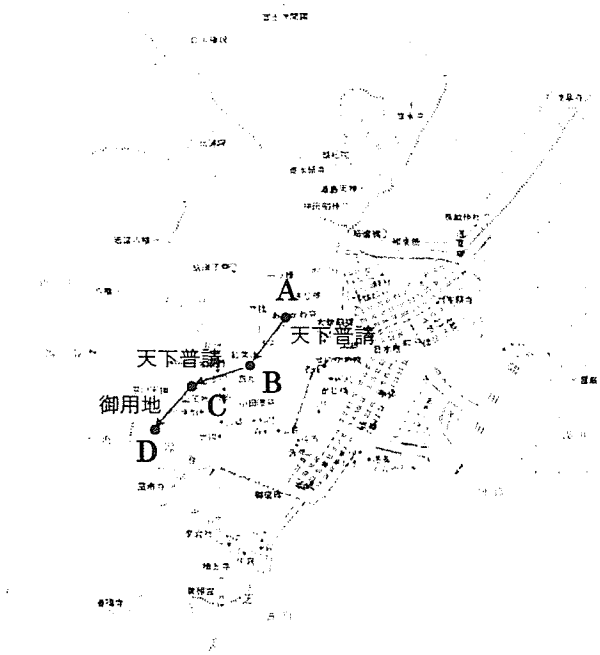


図11 日枝神社の配置変遷

(内藤昌「江戸の町[8]」の原図より篠田作成)

## 5、結論および今後の課題

本論文における研究の結果、以下の点が明らかになった。

①神社の創祀について

- 平安・室町・江戸時代に創祀する神社が多い
- はじめは台地端や山上、水際など、地形の特異点に立地する神社が多かった。
- のちには幕府の城下町政策上の理由のために町中、低地、湿地に立地する神社が増加する。

②神社の遷座について

- 室町から江戸時代に特に頻繁に遷座は行なわれており、その目的は為政者の都市設計方法によるところが大きい。
- その主な目的は、幕府の城郭整備と城下町開発であった。
- 城郭整備が目的の場合、城郭用地として利用している。社地は城内から城外へと移動し、立地条件は元社地と劣らない場所へと移動する。
- 城下町開発が目的の場合、再開発(武家地、火除け地など)のための用地として利用している。開拓地、新開発地の発展拠点として神社の存在を利用している。社地は立地条件の悪い町中、低地や湿地にも遷座させられることが多い。

③神社の立地場所について

- 基本的には台地端などが多く、地形的条件がその立地を決定させていた。
- 城郭整備や城下町開発が行なわれ始めると、地形的条件だけではなく、由縁や都市的要素もその条件に加わる。

今後の課題としては、江戸以外の城下町での神社配置を研究することにより、より一般的な神社の配置原理を解明することが挙げられる。

謝辞

この論文を書くにあたり、多大なご協力を頂いた先生をはじめ、皆様に感謝します。

**参考文献**

1)池田佳介「近世城下町における水路網形成と都市秩序ー水路網と街路網の角逐ー」 1995 東京大学卒業論文

2)阿部貴弘「江戸における都市秩序形成ー町割の規範と水系設計ー」1997 土木史研究 no.17 pp357-368

3)鈴木理生『江戸の都市計画』1988 三省堂

4)鈴木理生『幻の江戸百年』1991 筑摩書房

5)『御符内寺社備考 第一冊 神社』名著出版 1986

6)『東京都神社史料』 東京都神社庁 1966

7)児玉幸多 『復元江戸情報地図』1994 朝日新聞社

8)内藤昌『江戸と江戸城』1992 鹿島出版会内藤昌

9)『江戸の町 (上)(下)』1986 草思社

10)鈴木棠造、朝倉治彦校注 『江戸名所図会』1975 角川書店

11)『帝都復興事業大観』1930 日本統計普及会